

経営者への活きた言葉

二宮尊徳の報徳仕法にヒントがある 玄侑 宗久(福聚寺住職・作家)

1. そもそも「しあわせ」という和語は奈良時代、「為合」という字を当てたのが始まりです。これは天に合わせるという意味ですが、日本人は自然は人間の手に負えないものと考えていましたから、ほとんど運命のような意味だったんです。これが室町時代に入ると「仕合」、つまり人間対人間の話になる。相手にどのようにしあわせるか、ということで仕合(試合)という言葉もここからくるんです。
2. 武道で相手より先に攻めるのを「^{セン}先の^{セン}先」、相手の出方を待って応ずるのを「^ゴ後の^{セン}先」と言いますが、「後の先」は相手にしあわせるやり方です。
目の前に問題が起こった時、マニュアルに頼らずに自分の中の力を信じて、いまこの場で最善の道を直観的に選ぶ取ることが、「しあわせ」への道標だと思います。
これはお金や物の量などで量れる西洋的なハピネスとは大きく違います。
3. 私はこういう厄介な時代だからこそ、「徳を以て徳に報いる」という二宮尊徳の報徳仕法を改めて見直さなくてはいけないと思います。尊徳は至誠、勤労、分度、推譲という四つの考えの上に、「一円融合」という思想を説いています。
要するに、存在するものは皆、一見対立しているように見えてもお互いに働き合って一体となっているという考え方です。人間同士、人間と自然との関係がどうあるべきか、一つのヒントがここにあるように思います。

(参考:「致知」2012年12月号)

経営者のための危機管理

電機メーカーで起きていること 富山 和彦(経営共創基盤代表取締役CEO)

1. シャープで起きている問題はすべての電機メーカーで起きていることだ。その中で、もともと財務的な余力が少なく、液晶のほかに稼げる事業すなわちバッファが小さかったシャープがいきなり厳しくなった。日本の電機メーカーは総合化しており、重電からAV、テレビ、通信、IT領域まで全部手を広げている。
かつ、垂直総合を志向し、最終組み立てだけでなく、半導体や液晶といったデバイスまで自社で造る。横が広くて縦も深い業態です。
2. そのモデル自体が、実は10年以上前から苦しくなっていた。その中でも最大手クラスでなかったシャープは、液晶という領域、つまり縦に思い切って絞り込む大勝負をかけ、結果的にそれが裏目に出た。日本の電機メーカーでも利益を上げている部門や事業には共通点がある。部品点数が多く、メカトロニクスで、熱力学がかかわっている。いわばアナログの世界であり、白モノ家電や住宅設備機器なのがそうだ。

(参考:「週刊東洋経済」:2012年10月20日号)